

令和元年度第4回医学情報センター貴重書展示

醫とならば、君子醫となるべし。小人醫となるべからず。

君子醫は人の為にす。人を救ふに志專一

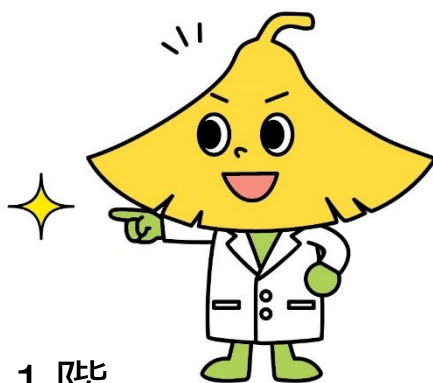
小人醫はわが為にす。身の利養のみ志

醫は仁術なり。故ふを以て志とすべし。

他ノ為ニテハ己ノ利ヲ求メズ是即医業ノ本躰ナリ。故ニ安逸利益歡娛
快樂ヲ以テテ己ノ健全生命ヲモ顧(かえりみ)ズ(ず)。
更ニ名譽ヲ以テテ其最貴ノ目的ニ従事スベ

シ。目的トハ何ゾ。他ノ生命健康ヲ救全スルノ一途ノミ。

医の心得



医学情報センター 1階

令和2年1月7日(火) ~ 3月31日(火)

医師のあるべき姿、守るべき倫理については、昔から繰り返し語られてきました。時を経ても、その言葉は変わらず、「医の心得」を教え続けています。

今回の展示では、偉大な医学の先人が書状や著作に残した「いましめ」を紹介します。

◇展示資料◇

杉田玄白自筆書状

15×138 cm（巻紙）文化13（1816）4月25日付弟子宛書状

「玄白いましめの文」といわれるもの。

玄白が親しい弟子に宛てて、贈り物にお礼を述べ、あわせて治療の秘訣を料理に例えて、丁寧に論じた長文の書状です。玄白の死のちょうど一年前、84歳の時に書かれたもので、末尾に「老年で根気がなくなったため、三度に分けて書いた。文が前後しているであろうから、よろしく判読してくれるように」とあるとおり、3回に分けて書き継がれています。

医戒（済生三方附録）

（独）扶歇蘭度[フーヘランド] 原著 杉田成卿 訳 嘉永2（1849）刊（天真蔵版）26×18 cm
原本：C.W.Hufeland 原著の蘭訳本「Enchiridion Medicum 1838」からの重訳

ドイツの内科学者 Christoph Wilhelm Hufeland（1762—1836）の著作「医学便覧 Enchiridion Medicum」を杉田玄白の孫である蘭学者杉田成卿が翻訳したもの。

「医師の義務」の章が「医戒」として翻訳され、医師のあるべき姿を示しています。

医師は、自分の為ではなく他人のために、この世に生をえている。これこそが、医という職業の本体である。それゆえに、医師はただに安逸、利益、歓娛、快楽を捨てるだけでなく、自分の健康や生命も省みず、さらには自分の名誉さえも投げ打って、他人の生命と健康を救うという、最も高貴なる目的に一途に従事しなければならない。

養生訓

貝原 篤信 [益軒] 著

[京都] 永田調兵衛 正徳3（1713）刊 22.5×15.5 cm

第6巻の「扱医」の章で、医師としての心がけ、医学の学び方などについて、述べています。

医者になるならば、君子医といわれる医者になるべきだ。小人医になってはならない。君子医は、人のために尽くす。もっぱら人を救うことを志す。これに反して小人医は自分のためにするばかりである。自分の利益ばかりを求めて、人を救うことに専一ではない。医は仁術ではないか。人を救うをもって志とすべきである。

【参考文献】

- ・横浜市立大学医学情報センター古醫書目録／大島智夫編、横浜市立大学医学情報センター、1998.10
- ・杉田玄白史料解題／日本医史学雑誌、8(3・4)、3-43、1958
- ・養生訓（講談社学術文庫）／貝原益軒著、伊藤友信全現代語訳、1982.10